青い玉と銀色のふえ

小川未明

青空文庫

北のさびしい海のほとりに、なみ子の家はありました。ある年、まずしい漁師であったおとうさんがふとした病気で死ぬと、つづいておかあさんも、そのあとを追うようにして、なくなってしまいました。かねて、びんぼうな暮らしでしたから、むすめのなみ子にのこされたものは、ただ青い玉と、銀色のふえだけでありました。

青い玉は、ずうっと昔、先祖のだれかが、この海べのすなの中からほり出して、それが代々家につたわったのだということでありました。

なにかねがい事があるとき、この青い玉にむかって、真心をこめておねがいすると、その心が神さまに通じてかなえられるというので、おかあさんはこの青い玉を、とてもだいじにしていました。

玉はつやつやしていて、深い海の色のように青黒く、どこまで深いのか、底が知れぬように、じっと見つめていると、引き入れられるような気がしました。

そして、真心をこめておいのりをすると、青い玉の表に、海の上をとびさる雲のように、いろいろなことが絵になってうかんできて、ゆくすえのことをおしえてくれるのでした。

また、あるときは、青い玉がまっかにほのおのようになって見えたり、玉にひびがはいったりして、不安な気持ちをいだかせることもありました。

「これには、ご先祖のたましいがはいっているんです。」といっておかあさんがこの青い玉を

だいじにしたのも、ふしぎではありません。

おとうさんの持っていた銀色のふえは、その音色を聞くと、さびしいあら海にすさぶあらしのように、なんとなくひとりぼっちの感じを起こさせたり、またあるときは、反対に心を引きたてて、のぞみとよろこびをもたせることもありました。

そして、このふえの音がとどくところ、魚たちがその音をしたってよってくるので、思わぬ大漁がありました。

「まったくふしぎなふえじゃないか。」

「なんにしてもありがたいことだ。」

漁に出た人々は、なみ子のおとうさんの銀色のふえを手にとって、ふしぎそうにながめるのでした。

このふえもやはり、おじいさんのころからつたわっていましたので、これにも先祖のたましいがこもっていると、おとうさんは信じていました。

なみ子は、おとうさんが心をこめて、このふえをふいた日のことをおぼえています。

その日、海の上には、黒い雲がはびこり、いかにも北の国らしいものすごいけしきでした。雲の間からいな光がもれ、かみなりが鳴っていました。

「こんな日には、はたはたがとれそうだ。」と、おとうさんはいいました。

そして、ひさしぶりに大漁にしてみんなをよろこばせたいと、銀色のふえを持っていきま

した。

おとうさんが船の上でふえをふくと、たくさんの魚が、波の上でおどりました。いかやさばも、むれをつくってよってきて、思わぬ大漁になりました。

「季節はずれに、こんなにいろいろな魚がとれたのも、みんなふえのおかげだ。」といって、人々は、浜に帰ってから酒もりを始めました。

そして、人々は、お酒によいながら、おとうさんにそのふえをふいてもらって、その音色に耳をかたむけていると、またあすのはたらきに新しいのぞみがわき、たとえ、海があれていても、命をかけてはたらき、おたがいになかよくたすけあっていきたいという気持ちになるのでした。

いさましく人々の心をうきたてたあのときのふえの音色を、なみ子は、いまでもおぼえていました。

「もう一度、楽しかったあの時分になってみたい。」と、なみ子は思いました。

ある日、青い玉と銀色のふえを持ち出すと、すなはまの上で、おとうさんやおかあさんのことをしのびながら、じいっとながめていました。

「この青い玉は、おかあさんがだいじにしていらしたんだわ。ああ、この銀色のふえは、おとうさんが、みんなとお魚をとるときにふいたんだわ。」

なみ子が、海の方を見ながらつぶやいていると、

「やあ、なみちゃんか。そんなところでなにをしているな。」と、そこを通りかかったおじいさんの漁師が声をかけました。

「海の夕日が、こんなに赤くうつるのは、おじいさん、おかあさんが、空からあたしを見ていらっしゃるのかしら。」

なみ子は、青い玉にうつる美しい夕日をながめていいました。

「おっかさんも、おとっつぁんも、そりゃあ、おまえさんをじいっと見まもっていてくださるな。早く大きく、りっぱなおとなになるのを待っていられるぞ。」と、おじいさんは答えました。

「おじいさん、いまでもこのふえをふけば、お魚がよってくるかしら。」

なみ子は、こんどは銀色のふえをとり出して聞きました。

おじいさんは、なつかしそうに、にぶく光るふえをながめていいました。

「そういえば、このごろしけで、魚がすくないんだな。魚がすくないと、ついつまらんことでなかまわれがしたり、けんかが起こったりする。おまえのおとっつぁんはりっぱな漁師だったから、どんなときでもけんかなどしなかったがな。」

おじいさんは、なみ子のおとうさんを思い出してほめました。

「おじいさん、このふえをかしてあげましょう。よくふいて、たくさん、お魚をとってください。」

なみ子は、だいじなふえをさしだしました。
「ありがとう。おとうさんのかたみのふえをかりていいのかい。」
「魚がたくさんとれて、このはまの人たちがなかよくなれたら、おとうさんもきっとよろこんでくださるわ。」と、なみ子は心から答えたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　14」講談社
　1977（昭和52）年12月10日第1刷発行
　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「たのしい三年生」
　1957（昭和32）年1月
初出：「たのしい三年生」
　1957（昭和32）年1月
※表題は底本では、「青《あお》い玉《たま》と銀色《ぎんいろ》のふえ」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2017年11月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青い玉と銀色のふえ

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/